

[東洋の人物・動物像展によせて]

キジール石窟の人物・動物画

中央アジア東トルキスタンのクチャ市にある有名なキジール石窟は窟数236に及んでおり、その約三分の一に当たる札拜窟では中心柱窟が最も多いと言われます。それは多くの場合、長方形の平面で、石窟の中央あるいは後部には床から窟頂へ連なる方形の柱が具風んでいます。柱の正面には(時には背面にも)龕を開けて仏像を安置し、この中心柱によって窟は主室と後室に分かれ、この中心柱(塔)を巡って、僧徒が主室から後室へと右繞礼拝しました。

この主室の天井と後室への低い通廊天井はヴォールト(アーチ状)に作ったものが多く、これは石窟の崩壊を防止するための一つの方法であったそうです。このヴォールト天井には、時には側壁のものより保存が良い、内容豊富な壁画が残されており、中でも釈迦の前生の物語を描いた本生譚や、仏の因縁図、僧の山林修禪図には、人物図と共に各種の動物が登場します。連山を背景とする菱形の紫や白、黄緑、黒、薄茶といったそれぞれの区画の中に生き生きと描かれており、私はこの度、それを直かに見る機会を得ました。ここではその中から、第一期様式(500年前後)とされる作例を中心に幾つか紹介したいと思います。

人物図の秀れた一例として、本生譚として最も有名でわが国でも描かれている摩訶薩埵本生図が挙げられます。王子三人が林間に遊ぶうちに、一虎がいて二子を伴っていましたが飢えのために二子を食べようとしています。その時、薩埵太子は自らの身を以てこの虎を救おうと、虎の前に身を投じます。画面では、太子が崖から身を翻しており、地上では太子が臥して、傍らに一匹の大虎と二匹の子虎がそれを食べる姿があり、異時同図法を取っています。第38窟の主室天井右では、身を投げた後姿の太子が、白い環飾りをつけた頭から真逆に落ちて行きます。薄緑色の天衣は舞い、褐色の線で背溝を表わした白い肉付きの良い背中から腰にかけてを屈し、胸は細く、紫の裳はなびいて翻り、膝から曲げた両足は乱れて宙を掻きます。これがうす茶の地色の中に浮かび上り、キジールでも最も保存の良い鮮やかな色彩を見せています。下方には、叟せた茶色の大虎が太子の白い身体に鼻をつけ、太子は顔を斜に向け、右腕を顔の脇に上げ、腰を僅かに屈する姿勢で横たわっています。丸味を帯びた面長の顔に眉から鼻を連続した細線で描き、小さな口元を見せません。胸は細く、首の三道や胸の隆起や溝を褐色の

線で表して立体感を持たせています。人物は、キジールの他の壁画に見える仏、菩薩の描き方と同様ですが、ドラマチックな画題は巧みな写実的表現によって効果を上げています。

動的なシーンの秀れた描写は、スタンマ王本生図にもあります。日々人肉を食らい、変じて飛行の羅刹となった駁足(斑足)王が篤信のスタンマ王によって改心する話です。図では、侍女たちを伴って園池で水浴びするスタンマ王をさらった羅刹が翅を広げて空高く飛び去り、下方では女たちが慌てています。第114窟では、スタンマを白い肌、駁足王を黒い肌で描きますが、第38窟ではうす茶の地色の中に白で二人の王を表わします。両者の天衣や短裳、駁足王の翼は紫です。どちらも体軀は横に流れ、上方の駁足王はスタンマの首に腕を回し、もう一方の腕でスタンマの胸を抱きかかえ、両脚は交又して上方に向けられます。下方のスタンマは顔を駁足王の方に向けますが、右腕は上方にして手を広げ、左腕は駁足王の反対側に伸ばして逃げようとしています。左脚はピンと伸ばして宙を掻き、右脚は膝で強く曲げます。この場面は、あたかもパーミアンの天井画の飛天や、ボッティチェリの「ビーナスの誕生」に登場する飛翔する男女神を見るかのようです。

これらの図は、その鮮やかな色彩によって、天井を見上げた際に、容易に認められます。そして、このようなしなやかな人体描写は、

キジールの仏・菩薩・飛天のいずれにも共通して見えるものです。

動物画では、先ず、樹下に一人の婆羅門が坐り、その前に一匹の蛇、二羽の鳥、一頭の鹿が並んでいます。これは比丘精進力本生図で、精進力比丘が山中に修行していたところ、この四獣が常に比丘の左右に寄って来て休息し、昼は食を求め、夜は寝ぐらに帰って行きました。

左に一頭の獅子が臥し、その右に一匹の猿が跪き、上方では一羽の鷹が小猿を捉えて飛んでいます。これは獅子王本生図で、猿が二匹の子猿の保護を獅子王に託して出かけますが、獅子王の睡眠中に、子猿は鷹にさらわれ、鷹は獅子王に戒められます。

象・猿・鷓鴣本生図では、この順に次々とその背の上に互いが乗っています。ニグロダ樹の生長の過程を古くから知っている順に長幼の序を定めて、その順に背や頭の上に乗って人間に遊行したのです。

キジール石窟画の動物は数十種類に及び、紫、黒、茶など、色彩は対比的で、内容にも東西の隅話に通じるものもあり、第224窟の鹿の親子の図などにも見られるように一幅の動物画として鑑賞することもできます。

これらの仏教画の動物たちは、人間と同等であり、時には人間以上の徳を持って数々の教えを示しているようです。(村田靖子) (図の出典・『中国石窟 キジール石窟』平凡社、『克孜尔石窟志』上海人民美術出版社)

摩訶薩埵本生図 第38窟



スタンマ王本生図 第38窟



獅子王本生図 第14窟



象・猿・鷓鴣本生図 第58窟



母鹿捨身不失信本生図 第224窟

